

長崎県の取り組み

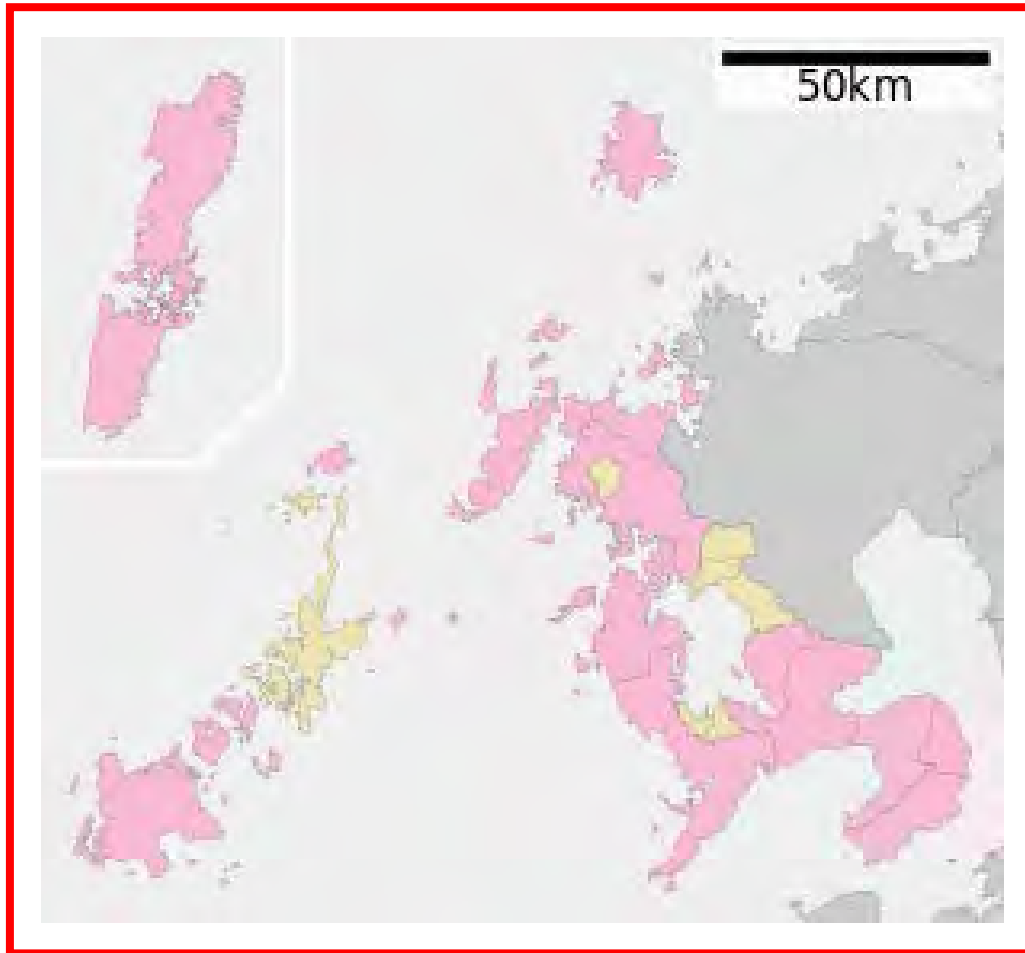
～小児高次脳機能障害実態調査の報告を中心に～



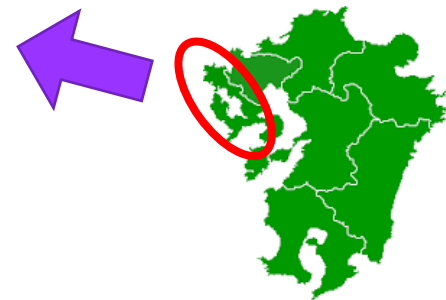


長崎県について

18未満
約22-23万人



項目	
面積	4,132.0km ²
総人口	1,374,155人 (2016年2月1日)
県の木	ヒノキ、ツバキ
県の花	雲仙ツツジ 
県の鳥	オシドリ
県庁	 長崎市江戸町2-13
自治体	21市町(13市、8町)
特徴	島嶼の数:971! 海岸線の長さ:全国2位



長崎県高次脳機能障害支援センター

実施主体：長崎県

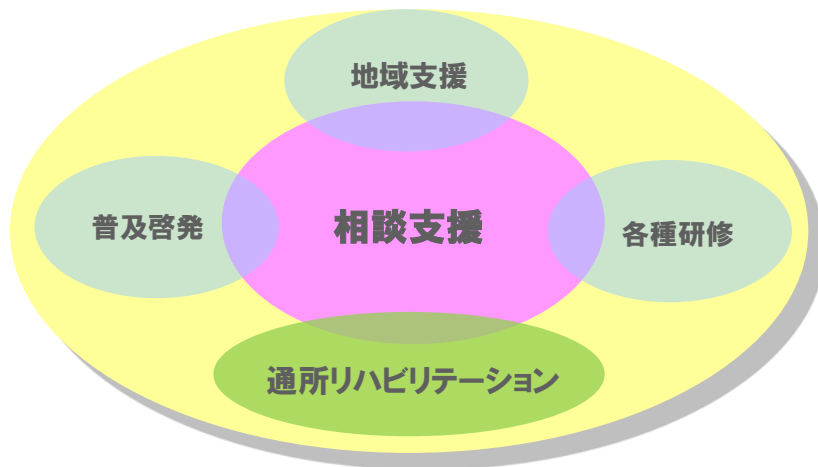
開設：平成19年7月2日 開設

高次脳機能障害者支援班
3名(作業療法士)
(理学療法士)
(言語聴覚士)



長崎県長崎こども・女性・障害者支援センター
(長崎県精神保健福祉センター)

〒852-8114
長崎市橋口町10-22
095-844-5515(直)



相談支援の状況

□ 相談ケース

年度	相談件数	相談時の年齢
平成26年度	実:6名 (継続:2名) (新規:4名) 	18歳未満(2名) 18歳以上(2名)
平成27年度	実:6名 (継続:3名) (新規:3名) 	18歳未満(3名) 18歳以上(0名)

参考までに・・・H27年度の相談実績

〔 「相談ケース」 実:68名(延:479) 〕
〔 「平均年齢」 38歳～39歳 〕

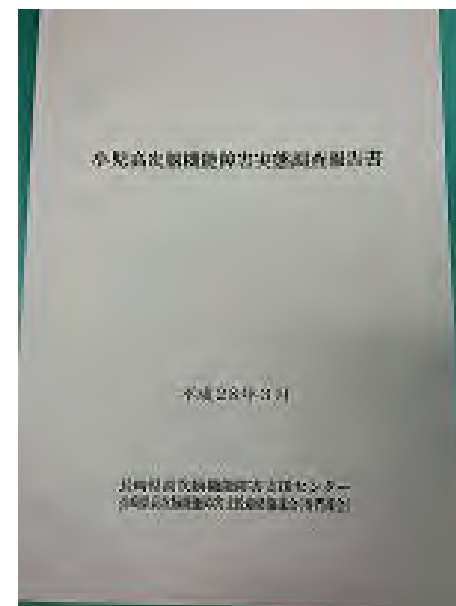
□ エピソードの紹介

実態調査までの経過

平成26年度	平成27年度
・ 専門部会を設置	・専門部会の継続
・アンケート調査票を作成	・アンケート調査を実施
	・ 調査報告書を作成



医療部門:6人	教育部門:8人
・小児科医師(2人)	・県教育庁
・脳神経外科医師	・市教育委員会
・理学療法士	・特別支援学校(CO)
・作業療法士	・普通小学校(CO)
・臨床心理士	・普通小学校(養護教諭)
	・作業療法士
	・言語聴覚士
	・臨床心理士



支援の流れ

受傷・
発症

急性期病院

回復期病院

教育機関

高次脳センター

帰結先が不明

- ・小児の年間搬送者の数が不明。
(実態がわからない)
- ・どこにつながっているか不明
- ・小児の高次脳機能障害への理解が不十分。



診断・評価・訓練できる施設が少ない

- ・高次脳機能障害の受け入れ施設が少ない。
- ・回復期病院にたどり着くまでの経過やその後の流れが不透明。



高次脳機能障害への理解が不十分

- ・発達障害との混同あり。
- ・教職員を対象にした研修項目にも高次脳機能障害は入っていない。
- ・相談先が不明。(医療や相談機関との連携が取れていない)



相談につながるまでの期間が長い

- ・障害と分からぬまま生活することで、失敗を多く体験し、社会不適応を起こしている場合が少なくない。
(潜在化している)



(現状)

小児期に受傷・発症した高次脳機能障害児がいる。適切な時期に適切な支援を受けられずに生活している。

(課題)

小児の高次脳機能障害児が受傷発症後、どのような支援を受けて、生活を送っているか等、実態がつかめていない。

(対策)

小児の高次脳機能障害児の現状と課題、支援ニーズの把握が必要。

目指すもの

『小児期の受傷／発症から途切れのない支援体制の整備』

いまだに多くの方が
潜在化している
可能性あり⇒

・救急搬送されてから、
どこにつながっているの？

・評価や訓練を行って
くれるところはどこなの？

・何人位いるの？

・学校ではどのように
生活しているの？

・どのような支援が
行われているの？



救急搬送

急性期病院

回復期病院

教育機関

高次脳センター

救急搬送データ

高次脳機能障害
リスク児の概数

搬送医療機関の
状況

*後天性脳損傷の
対象疾患
5ヵ年で452件
年平均**90.4件**



救急告示医療機関3機関

153件(有効回答数)

受入れ状況・支援内容
転帰情報

他県の先行報告から当県の
推測数は10~20人

*高次脳機能障害と診断された
児は**2例**

*見落とされている可能性が
大きい

*心理検査がされていない
153件中**5件**



<調査機関>

小児リハビリテーション
専門機関3機関

33件(有効回答数)

<調査目的>

支援内容・地域連携
復学支援・家族支援

<調査結果>

*高次脳機能障害と診断された
児は**6例**

*症状は把握されているが
診断には至っていない

*評価・検査はされているが、
訓練・支援はわずか



高次脳機能障害への
理解が不十分

- ・発達障害との混同あり。
- ・教職員を対象にした研修項目にも高次脳機能障害は入っていない。
- ・相談先が不明。(医療や相談機関との連携が取れていない)

相談につながるまでの
期間が長い

- ・障害と分からぬまま生活することで、失敗を多く体験し、社会不適應を起こしている場合が少なくない。(潜在化している)

急性期病院

回復期病院

教育機関

高次脳センター

帰結先が不明

- ・小児の年間搬送者の数が不明。(実態がわからない)
- ・どこにつながっているか不明。
- ・小児の高次脳機能障害への理解が不十分。

診断・評価・訓練できる施設が少ない

- ・高次脳機能障害の受け入れ施設が少ない。
- ・回復期病院にたどり着くまでの経過やその後の流れが不透明。

- 1 学校アンケート
- 2 個人アンケート
- 3 症例インタビュー

<調査目的>

診断のある児童・生徒の把握、支援内容、連携等の実態調査

<調査機関>

(学校アンケート)



県内の小・中・高・支援学校
648校



368校 (59.6%)

(個人アンケート)



研修会終了後アンケート



215名から回答

(症例インタビュー)



小児期に受傷発症し、
現在、成人となった
高次脳機能障害者

↓
3名

<調査結果>

- *高次脳機能障害児は**15校16名**
- *ことばは聞いたことがあるが、**実際の症状は把握していない**
- *支援の**経験が少ない**
- *学校種別により**ニーズが異なる**
- *相談機関の**周知**ができていない

- *復学までの期間が**短い**
- *復学後は「**記憶力の低下**」
「**対人関係**」で苦慮
- *復学、進学、就職時に適切な**引継**
がなされていない
- *診断までの期間は**ばらつきが大きい**



支援の流れ

受傷・発症

急性期病院

回復期病院

教育機関

高次脳センター

帰結先が不明

- ・小児の年間搬送者の数が不明。
(実態がわからない)
- ・どこにつながっているか不明。
- ・小児の高次脳機能障害への理解が不十分。



診断・評価・訓練できる施設が少ない

- ・高次脳機能障害の受け入れ施設が少ない。
- ・回復期病院にたどり着くまでの経過やその後の流れが不透明。



高次脳機能障害への理解が不十分

- ・発達障害との混同あり。
- ・教職員を対象にした研修項目にも高次脳機能障害は入っていない。
- ・相談先が不明。(医療や相談機関との連携が取れていない)



相談につながるまでの期間が長い

- ・障害と分からぬまま生活することで、失敗を多く体験し、社会不適応を起こしている場合が少なくない。
(潜在化している)



医療の調査から明らかになった問題点

医療従事者の認知度(↓)



訓練・療育方法が未確立



心理検査の未実施



教育の調査から明らかになった問題点

教職員の認知度(↓)



外部機関との連携(↓)



引継が脆弱



受傷・発症

急性期病院

回復期病院

教育機関

高次脳センター

帰結先が不明

- ・小児の年間搬送者の数が不明。(実態がわからない)
- ・どこにつながっているか不明。
- ・小児の高次脳機能障害への理解が不十分。



診断・評価・訓練できる施設が少ない

- ・高次脳機能障害の受け入れ施設が少ない。
- ・回復期病院にたどり着くまでの経過やその後の流れが不透明。



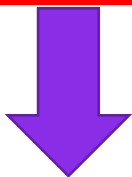
高次脳機能障害への理解が不十分

- ・発達障害との混同あり。
- ・教職員を対象にした研修項目にも高次脳機能障害は入っていない。
- ・相談先が不明。(医療や相談機関との連携が取れていない)



相談につながるまでの期間が長い

- ・障害と分からぬまま生活することで、失敗を多く体験し、社会不適応を起こしている場合が少なくない。(潜在化している)



医療・教育2つの調査より明らかになったこと
(共通した問題点)



対象者の実態把握ができていない

連携も十分でない



(医療⇔教育)

(教育⇔教育)

普及啓発が必要

高次脳機能障害が
見落とされている可能性が高い
医療機関と教育機関の連携は
充実しているとは言い難い

必要と思われる取組

直接的支援



組織化活動
(連携)



教育・普及啓発



今年度の取組について

27年度

28年度

29年度

実態調査



1 研修会の開催

2 リーフレットの作成

3 **支援体制整備の推進**

専門部会の設置

目的: 途切れのない支援体制整備の推進

回数: 4回

内容: ① ケースを通じた課題の整理と
関係機関の関わり方の検証

② 子ども版: 手引きの作成

委員: 8名程度

